2～3面　日本YWCAの東日本大震災被災者支援
4～5面　福島YWCAからのメッセージ
8面　第33総会期の新たなビジョン・ミッション

The Young Women's Christian Association
YWCA

〈第33総会期主題聖句〉
平和を実現する人々は幸いである
―マタイによる福音書5章9節―

〈ビジョン〉
女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切にする社会

〈ミッション〉
若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。

〈バリュー〉
キリスト教基盤　平和・環境　人権　セーフスペース

2
FEBRUARY 2021
No.760

www.ywca.or.jp

東日本大震災から10年

これから先もともに歩もう

福島の子どもたちを招いた
リフレッシュプログラム／
2019年3月（写真：熊本YWCA）

2011年3月11日、平穏に暮らしていた人々をマグニチュード9の激震が襲った。日本の観測史上初とされる揺れは、東北から関東にかけての沿岸部に壊滅的な被害をもたらし、翌12日、東京電力福島第一原子力発電所の水素爆発を引き起こした――。
日本YWCAは直後から支援活動を展開し、被災者に寄り添い、ともに歩もうと模索してきた。あれから10年。これまでの歩みを振り返り、大切なことを想い起こそう。新たな一歩をともに踏み出すために。

日本YWCAの東日本大震災被災者支援事業

「女性と子どもの安心と安全のために」を出発点に

東日本大震災の直後から日本YWCAは「女性と子どもの安心と安全のために」を掲げ支援活動に取り組んできました。あの日生まれた子どもたちが二十歳を迎えるまで、少なくとも7300日間を共に歩む決意は今も揺るぎません。あの日から10年目を迎えるにあたり、これまでの活動を振り返り、思いを新たに次の歩みへと進みます。

三本柱の支援で寄り添い、共に歩む

60数年前、国が新しいエネルギー政策としてスタートさせ全国に拡張していった原子力発電ですが、2011年3月11日の東日本大震災により、東京電力福島第一原子力発電所が水素爆発を起こしました。

日本YWCAは早々に被災地支援の調査を始め、地域YWCAに呼びかけ、宮城県の県境にある福島県新地町災害ボランティアセンターへの協力を開始しました。またcom7300委員会を立ち上げ、地域YWCAと連携し、被災した女性と子どもの心身を守り、寄り添い、この年に生まれた子どもたちが二十歳になるまで支援を続けることを決定したのです。翌年11月には、福島駅から徒歩数分の場所に、支援活動の拠点「カーロふくしま」を開設しました。

com7300委員会はこれまで、①地域YWCAが子どもたちを招いて自然の中でのびのび過ごす「リフレッシュプログラム」、②地域YWCAより提供された県外の住宅で、家族単位で自由に過ごす「セカンドハウスプログラム」、③「カーロふくしま」を拠点として地元で展開するさまざまな事業、この三本柱で支援活動を行い、利用者から評価を受けています。

「カーロふくしま」を拠点として行った福島の高校生のための学習プログラムでは、参加者たちが企画した「みんなでエネフェス！」を開催し、「ふくしまから考える新しいエネルギー」を自ら発信しました。

オンラインで福島の現状を全国へ

コロナ禍の今年度は、例年のプログラムが延期や中止に追い込まれました。そこで県外で過ごすプログラムへの参加が叶わない子どもたちのために、「カーロふくしま」で学習支援と交流を合わせたプログラム「カーロでスタディ」を新たにスタートしました。年齢や居住地域を超え、講師の大学生と参加者同士が集い、楽しい時間を共にしています。また、これまで対面で行ってきた「カーロふくしま　おはなし会」をオンラインに変更し、全国に発信しています。5月には、福島大学特任教授の前川直哉さんが、「支えられる存在から誰かを支える存在になりたい、誰かを幸せにするために学びたい、誰かの世話になりっぱなしは嫌だ」という福島の学生たちの思いを伝えてくださいました。7月は「生業を返せ、地域を返せ！」福島原発訴訟原告団長の中島孝さんが、仙台高裁で訴訟中だった裁判の状況を語ってくださいました。この2か月ほど後に勝訴判決があり、共に喜ぶことができました。これまでなかなか発信できずにいた福島の現状を、オンラインにしたことで毎回多くの参加者と共有できるようになり、原発事故を決して風化させてはいけないという福島への思いを広げています。

ニーズにあった活動を実践し続けていく

原発事故から10年を迎えます。福島県内では、姿が見えない、匂わない、感じない放射能に対して、「もう大丈夫でしょう」「まだ気にしているの？」という反応が多いと言われています。放射能に対する不安だけでなく、デマや誹謗中傷による苦痛の中で過ごす方々がいることも事実です。「久しぶりに洗濯物を外に干しました」「家族でゆっくり散歩しました」との「セカンドハウス」で過ごした方々の感想から、偏った日常を送っていることが垣間見えます。結局、何も解決していないのです。

これからもYWCAは「カーロふくしま」に集う人や他団体と連携し、福島の現状を正しく把握し、それを発信し、ニーズにあった活動を考え実践を続けていく必要があります。引き続きみなさまのサポートをよろしくお願いいたします。

第32総会期com7300委員会

YWCAの支援

それぞれの理由で福島に留まる女性や子どもたちが親しみ集う「カーロふくしま」では、多彩なプログラムを実施

学校の長期休暇を利用して参加する「リフレッシュプログラム」。自然の中で数日間を過ごす（写真：名古屋YWCA）

支援の原点に立ち返る

『核』の問題に取り組み続けるYWCAの歩み

YWCAの東日本大震災の被災者支援事業は、特に東京電力福島第一原子力発電所の事故によって被災された女性や子どもたちの心と身体を守るために続けられてきました。それは同時に『核』の問題と向き合い続けることでもあります。YWCAの核問題への取り組みの歩みを振り返って、支援の原点に立ち返ります。

日本YWCAが『核』否定の思想に立つまで

1954年3月1日ビキニ環礁での水爆実験で、第五福竜丸が被ばくし死の灰を浴びた久保山愛吉無線長は原爆症のため亡くなりました。この水爆実験に対して激しい議論の起こる中、日本YWCAは直ちに資料の収集を始め、慎重な討議を重ねた結果、「原水爆製造使用禁止の願い」を世界YWCA・各国YWCAに送付しました。世界的なつながりを持つ団体として、冷静にしかし強い言葉で訴える文章であり、日本YWCAが核問題と取り組む姿勢の出発点でした。その後の日本YWCAの具体的活動は、社会への責任を伴うものとして、政治への発言・地域社会への貢献・女性の社会教育・意識変革へと変わっていきました。

「基本的人権の確立と擁護」を柱として活動してきたYWCAは1970年、「『核』否定の思想に立つ」という言葉を初めて打ち出しました。これは、「核」を頂点とした現代文明に否を言うことであり、自分たちの生き方を問い直す表明でもありました。その中には当然原子力発電が含まれていました。この思想はその後「ひろしまを考える旅」などの具体的なプログラムによって少しずつ内実化していきました。一方で『核』を否定する一人ひとりの思想に立つことの重要性に思い至り、一人ひとりが内容を深め、よって立つところを確立していきました。

学びの中での確信「人類と核は共存できない」

1986年のチェルノブイリ原子力発電所事故の後は、活発に勉強会が開かれました。あるグループでは、二児の母親の視点で原発の問題を研究した甘蔗珠恵子さんの著書『まだ、まにあうのなら』をテキストに、放射能の子どもたちに対する影響・食品汚染のメカニズム・原発推進の愚かさ・電力需要のトリック・放射性廃棄物の危険性などを学んでいきました。原子力発電所建設に責任者として携わった方からは「原発とはこのようなものだ」と題した講演を聴いたこともありました。その是非は聴いた人自身の判断に委ねられるものでした。また、政府の原子力政策について自由な見地からの分析・提言を行うための原子力資料情報室設立者、高木仁三郎さんの講演録『科学の原理と人間の原理』をていねいに読み、人類と核は共存できないことをいよいよ確信していきました。高木さんは原子力時代の末期症状による大事故の危険性と放射性廃棄物の垂れ流しになっていくことに対する危惧の念を〝最後のメッセージ〟に残して2000年に亡くなりました。11年後、そのメッセージは現実のものとなりました。

声にならない声を自分の声として発していく

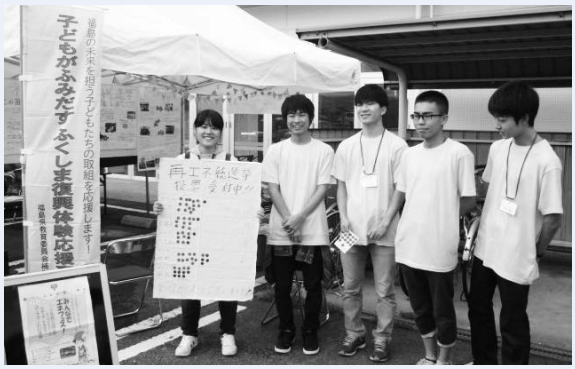
東日本の広大な土地で、人が、家屋が、木々が、ただ流される様をなすすべもなく、茫然と目にするしかなかったあの日。その翌日には、東京電力福島第一原子力発電所の爆発が起きました。原発の恐ろしさを学んでいた私たちは、日々目にする映像に心が凍り、冷静に受け入れることのできなかった日々を忘れることはできません。今なお福島の人たちは長く厳しい戦いを強いられ、多くの作業員は命を懸けてこの難局に立ち向かっています。

死せる者の声、
声を発せられない生命の声を
どれだけ自分の声として発せられるか
『科学の原理と人間の原理』

高木さんが残したこの思いに、一人ひとりが自分の思いを重ね、少なくともあの日生まれた子どもたちが二十歳を迎えるまで、私たちの支援は続きます。希望をもって祈りつつ。

日本YWCA代表理事　実生律子

福島の小中学生を対象とした学びと交流の「カーロでスタディ」。感染対策をして短い時間で開催している



体験型学習プログラム「ふくしまから考える新しいエネルギー」に参加した高校生。後に大学の工学部に進学した人も

※『まだ、まにあうのなら　私の書いたいちばん長い手紙』甘蔗珠恵子著（地湧社）
※『科学の原理と人間の原理 人間が天の火を盗んだ―その火の近くに生命はない』高木仁三郎著（方丈堂出版）

10年を振り返って

YWCAの仲間に支えられて歩んだ10年

福島YWCA会員
渡辺園子

震災から4カ月、14人の子どもたちが京都で2週間のホームステイを楽しんだ（2011年）

泣き叫ぶ母親たちの声が今も耳から離れない

福島市から県外避難する人々がいる一方、留まらざるを得ない市民、さらにはその福島市に原発周辺の地域から避難してきた人々もいました。

事故の翌月、子どもたちを放射能から守るための集会が福島市内で開かれました。広い会場で「子どもをどうしよう？　避難させて！」と、我を忘れたように泣き叫んだ母親たちの声が、10年を経た今でも耳から離れません。福島YWCAは1969年の創立当初から原発への反対運動をしていましたが、反対しきれなかったことをグループ討議の席で謝るしかありませんでした。

母親たちの悲痛な思いを受けて「市民一人ひとりが放射線に対する正しい知識を持たなければ」と、福島YWCAでは講演会や学習会を開き、共に学びを深めていきました。

心配だったのは、やはり子どもたちのことでした。市内にはホットスポット[※2]が点在していたため、小さな子どもは家から出られずにいました。窓を閉め、エアコンも止めて外気の侵入を防ごうとした家庭も少なくありません。外遊びをほとんどしないため靴を履くことができなくなった子どもが増えたと聞いたこともあります。そんな福島の親子にとって、日本YWCAの「セカンドハウスプログラム」や「リフレッシュプログラム」は貴重な支援でした。その年の7月、プログラムの参加者を福島駅に見送りに行くと、炎天下で子どもたちがマスクを着けていました。この子たちが一時でも新鮮な空気を吸って思いっきり外で遊べるのです。これまで子どもたちを受け入れてくださった地域YWCAには感謝しかありません。

事故直後から空間放射線量の測定器を持って会員宅や市内を回り、測定記録を作成した

ここは「福島」ハッピー・アイランド

「福島に住んでいて大丈夫なの？」

一時期、県外の方からよくこのような質問をされました。心配してくださってありがたく思う反面、放射線の身体への影響に関する無知から福島に住んでいると思われているように感じて、精神的に落ち込んだものでした。福島に住んでいる自分、ここで生きていく自分を否定したくなかったのです。

さらに追い打ちをかけたのが、「フクシマ」と表記されるようになったことです。反核の立場からはヒロシマやナガサキと同様に捉えられるのですが、しかし、戦争による被ばく都市として恒久平和を目指す広島の市民が自らヒロシマと表しているものとは違う、と思ったのです。フクシマとされることは、実に情けなく、悲しいものでした。「ここは福島、happy islandです。漢字に変えていただけませんか」と願い出たこともありました。いつか元の福島に戻る希望も込めて「福島」であり続けたかったのです。

大きな試練の中で得た仲間との絆の深まり

東日本大震災、原発事故は福島で暮ら

桃の花が咲くころ、福島にまた新しい春が訪れる

※1 東京電力福島第一原子力発電所1号機は1967年着工、71年営業運転開始
※2 局地的に空間放射線量が高くなっている地点

from 福島YWCA

変化していく福島の現状を伝えていきたい

福島YWCA会長
荒木紀子

ユースからシニアまで多世代の参加者が8年目の福島を体験した

東京電力福島第一原子力発電所の事故以降、地域YWCAの方々が福島を訪ねて学んでくださいました。その姿を通して、当事者である福島YWCAが主体となって、震災と原発事故からの体験を全国の地域YWCAの方々と共有したいと願うようになりました。

そのようなとき、地域YWCAが主体となり協働して展開するプログラムに日本YWCAが資金等を提供する「LA（ローカル・アクション）」企画を知り、これは神が与えてくださった機会に違いないと受け止めて、プログラムの申請を行いました。

2019年6月、仙台YWCA・静岡YWCA・新潟YWCAの協力を得て、8年目の福島を体験する1泊2日のツアー※を開催し、地域YWCAから多世代の参加者が集いました。

ツアーでは自然エネルギーを活用する温泉街や、廃炉に向けた技術開発を行う施設などを訪れましたが、中でも、飯館村で唯一、帰還困難区域の指定が解除されていない長泥地区の区長（当時）鴫原良知さんのお話には、多くの参加者から感動したとの声をいただきました。地区への帰還と引き換えに、除染作業で出た汚染土壌を農地に再利用するための環境省の実証事業を受け入れるという苦渋の選択を迫られましたが、それでも前向きに生きる鴫原さんの姿は心を打つものがありました。昨年10月、鴫原さんのその後を伝えるため、福島YWCA主催のお話し会をオンラインで開催しました。環境省の事業が始まり、汚染土壌の再利用に向けて農作物の試験栽培に取り組み、個人的にも自宅を取り壊されるなど困難が続いています。それでもやはり帰還を目指して前向きに歩みを進める鴫原さんの姿がありました。

帰還困難区域に指定された飯館村長泥地区の鴫原良知さん

仲間とともに歩んだ10年

10年の歩みのなかで、うれしかったこともありました。若者不在だった福島YWCAにユース会員が誕生したことです。2016年、日本YWCAの被災者支援の一環で、福島の高校生を対象に再生可能エネルギーを学ぶプログラムが開催されました。これに参加した高校1年生の若者が翌年、福島YWCAに入会しました。「このプログラムや熊本YWCA主催のリフレッシュプログラムに参加し、YWCAの魅力に触れ、自分も一緒に活動したいと思った」と語っていたことが印象的でした。震災と原発事故の経験があったから誕生した新たな仲間ですが、福島を支えてくださった全国のYWCAの仲間の存在がなければ、入会には至らなかったと思います。

この10年の福島YWCAの歩みは、YWCAに連なる仲間と共に歩んだ10年でもあります。これまで支えてくださったみなさまに、心から感謝を申し上げます。

これからの福島を見つめて私たち福島YWCAにできることは限られていますが、変化していく福島の現状をさまざまな形で伝えていきたいと思っています。

今年の3月11日には福島YWCA主催のお話し会をZoomで開催し、この10年の被災者支援で支えてくださった地域YWCAの方々と共に振り返り、現状の課題を確認しながらできることを探っていきたいと考えています。

思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです。

（ペトロの手紙一　5章7節）

御言葉を支えに、これからもこの福島の地で歩み続けてまいります。

※「～見て つながって 創る私たちの未来～　原発があって幸せですか
『8年目の福島を体験する1泊2日福島ツアー』」

第33総会期の新たなビジョン・ミッションとは

未来への歩みを進めるために

第33総会期を迎えた日本YWCAは、世界のYWCAと足並みを揃え、若い女性と共に社会を変革するため、新たなビジョン・ミッション・バリューを打ち立てました。その目的や趣旨をここで改めて確認し、未来への歩みを進めよう。

日本YWCA会長
藤谷佐斗子

的を射るために必要なものは何か

ビジョンとミッションは、的とそれを射貫く矢にたとえられます。

組織マネジメントの基本は、まず組織が目指す将来の姿（ビジョン）を共有することから始まります。次にそのビジョンにむかって、組織全体が、それぞれの立ち位置で、日々取り組むべきもの（ミッション）を共有します。何に取り組むのか、どのように取り組むのか、方向軸がぶれないように、価値観（バリュー）を共有しながら、関わる人々の総意で計画を実行し、振り返りを行い軌道修正しながら、一歩一歩前に進めて、目指す姿の実現をつかみ取ります。

さて、私たちが目指す将来の姿「ビジョン」を「的」にたとえてみれば、達成までの距離＝時間はどのくらいかかるのでしょうか。「矢」とは、「ミッション」です。的に向かって、まっしぐらに突き進む「矢」は、正確に的に向かっているでしょうか。「的」は1つに絞っていますか。しっかりと「弦」を弾き放つ筋力（たとえれば予算）は大丈夫でしょうか。「バリュー」（ゆるがない価値観）は、「矢」を構成する素材や材質にたとえてみてはどうでしょうか。重すぎても、軽すぎても「矢」は、正しく飛びません。また、「矢」が1本しかないのでは、失敗してしまえば、後の打ち手がありません。失敗も想定して、何本も「矢」を準備することも必要ですね。

「的」を射る、ビジョンを達成するということは、それだけの中長期の作戦の上、覚悟をきめて挑戦するということです。これまでの私たちは、射る人の筋力が足らず、「的」まで飛ばせる力がなかったり、絞り切れないほどの多すぎる「的」で、「弓」の数が足りなかったり、しっかりとした「弓」を作るノウハウが足りないということが、あったのではないでしょうか。

ベクトルを合わせるために

日本YWCAの、これまで115年の歩みは、キリスト教が基盤のため、会員間で共有する言葉や言葉の持つ意味は、一般的な解釈とは、意味が微妙に異なることが多かったように思います。お怒りを覚悟でいえば、一般社会では、「みことば」や「恵み」「思し召し」といった言葉は、いわれても理解できる人は少ないのではないでしょうか。

新しいビジョンは、組織内部の改革のためではなく、広く社会を変革するためのものです。「的（ビジョン）」は、荒波の向こうにあります。そのためには、まずはキリスト教基盤では、当たり前と思って使っている言葉の意味も、基盤を越えて、世代間を越えて共通のものにするという作業が、組織を変革する上では、まず必要になりました。そのために、この4年間、否、その前総会期を合わせると8年間をかけて、YWCAという組織が、組織の外からどのように思われているのかを可視化し、組織の強みを外の社会に理解してもらうためには何が足りないのか、専門家のアドバイスを受け、言葉の定義や、YWCAの強みを社会にむけて、発信できるように整理してまいりました。

さらに、世界に連なる一つの組織としての強みを生かすために、世界YWCAの2035ビジョンにベクトルを合わせるという言葉の整合性も必要です。地域YWCAと何度もやりとりをしながら、この作業がなぜ今必要なのかを、過去の歴史資料や、現状分析の動向資料、未来像を示唆するための資料とともに、応答を続けることで、一つにすることがなぜ必要なのか、理解を得ることができました。

私たちの組織は、ようやく一つのビジョン

（的）に、向かってミッション（矢）を射る、ベクトルが定まったということです。

YWCAの描く未来図は

この応答の末に、生み出されたのが第33総会期のビジョン・ミッション・バリューです。

世界YWCAは、2019年の世界YWCA総会において、中長期の計画として「2035ビジョン（1億人の若い女性が、権力構造を変革し、ジェンダー平等、正義ある平和、暴力のない世界をつくりだす）」の実現を目指し「世界YWCA運動を強化し、維持する」ことを、具体的に進めると決めました。日本YWCAも連なる組織として、目標を共有し、国内のそれぞれの地域において活動を推進していきます。

「1億人」の数字の根拠は、社会変革をするために必要な人数として世界YWCAが積算した数字です。その数値を国内の人口数に置き換えて数字を出してみれば不可能な数字ではありません。また地域YWCAそれぞれにおいて、若い女性を支援し続けるための、支援者育成プログラムや、セーフスペース、主体的に集えるプログラムの実施、支援の継続性を担保するファンドレイジング等、これまでの強みと、ネットワークを生かし、世代間を越えた協働によって、さまざまな取り組みが可能になります。

YWCAの組織の大きな特徴の委員会制度は、合議で方向性を決めるという、民主的には理想的な制度です。しかし、決めるまでに時間がかかりすぎるという弱点もあります。

すさまじい勢いで、よくも悪くも変化している時代において、私たちがこれからも存在し続けるためには、これまでのスピード感では社会のニーズに的確に対応ができないということが懸念されます。ビジョンにベクトルをあわせ、多世代のそしてミッションを推進するための力をもったチームで、俯瞰的な視野で柔軟性を失わずに取り組むことによって、継続的に事業が続けられる組織として、そして社会になくてはならない存在として、生き残っていくことが可能になります。

さあ、私たちが目指すビジョンは、15年後にやってくることを信じ、女性がリーダーシップを発揮し、人権・平和・環境を大切にする社会が実現することをイメージしましょう。その実現は、日本だけではなく、世界中の女性たちの目指す夢です。私たち一人ひとりが、的（ビジョン）に向かって、どのように弓（ミッション）を飛ばすのか、これから挑戦の道が始まります。

第33総会期日本YWCAのビジョン・ミッション・バリュー

主題聖句

「平和を実現する人々は幸いである」
マタイによる福音書５章９節

ビジョン（めざすこと、未来像）

女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切にする社会

ミッション（未来像のビジョンに向かって、今取り組むべきこと）

若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。

バリュー（ゆるがない価値、とても大切にしていること）

1. **キリスト教基盤**
すべての人は神の前に等しい価値をもつと信じ、常に弱い立場に置かれた者の側に立たれたイエス・キリストの生き方に倣(なら)って行動します。

2. **平和・環境**
アジア・太平洋戦争の反省から生まれた平和憲法を活かします。すべての「核」を否定し、軍事基地を含む暴力のない公正で持続可能な社会をめざします。

3. **人権**
人権・国籍・宗教・性・出自・年齢などの多様性を互いに尊重し、ジェンダー平等のもとで誰もが自分らしく生きることができる社会をつくります。

4. **セーフスペース**
会員（ボランティア）が主体的にプログラムを推進し、すべての活動を、多世代協働によって民主的に運営します。常に誰にとっても安心安全な空間をつくり、誰もがエンパワーされる場とします。

エンパワーするNGO

YWCA

苦難から生まれる希望を信じて

第33回全国会員総会報告

2020年11月23日、全国の24の地域YWCAと東京の日本YWCA事務局とをオンラインで結び、臨時全国会員総会と第33回全国会員総会を開催した。まず、映像と日本YWCA会長のメッセージで4年間の活動を振り返り、世界YWCA会長・総幹事からのビデオメッセージでは、私たちの活動が、世界のYWCA運動につながっていることを実感できた。地域YWCAからは画面を通して工夫を凝らした活動紹介がなされた。続いて、臨時総会での会則改正と全国会員総会における新たなビジョンという二つの主要な議案について、これまでの議論の積み重ねの報告があった。運営委員の選考方法を2年ごとに半数改選することに改め、緊急時に書面や電磁的方法による決議を可能にする会則改正案が可決され、今総会期の主題聖句・ビジョン・ミッション・バリューが示された。新制度による選挙結果報告では、35歳以下が半数となった新役員・運営委員が紹介された。Y's Wonderful Women賞では激動の時代にYWCA運動の土台を築いてくださった先輩方に感謝をささげ、最後は祈りと賛美の時を持ち、日本YWCA会長に就任した藤谷佐斗子さんの力強いメッセージで締めくくった。苦難から生まれる希望を信じて、新たな4年間を歩んでいきたい。

日本YWCA書記　吉田亜希

ご協力ありがとうございます

賛助費

青木惠子　赤石めぐみ　秋元靖子
阿部幸子　五十嵐和子　池上幸子
石川玲子　石田翠子　石原艶子
井田すみ　板橋幸子　板橋俊子
伊藤眞代　稲本佑子　井上玲子
杁山逸子　臼田治子　梅林宏道
江﨑啓子　笈川光郎　大里喜美子
小野田照代　梶山順子　柏木妙子
片山惠　加納美津子　神谷候子
河越良子　河﨑純子　河村千恵子
木下由美子　小泉陽子　郡恭子
古藤春世　後藤光彦　小村明子
小谷野淳子　金剛静慧　近藤眞由美
坂上信子　汐崎康子　鹿野幸枝
篠原洋子　清水嶋洋子　下村昭子
首藤和子　杉田佐紀子　須部道子
田中暉彦　谷山久美子　田村惠美子
土屋明子　都木惠子　徳永明子
得永道子　外﨑弘子　富沢寿美子
富田直美　長尾眞理子　中尾貢三子
中島美登里　中山美津江　仁木三智子
西田和子　新田和子　野澤節子
野村春江　野呂幸子　畑山みさ子
馬場元毅　原紀子　東根順子
比企敦子　笛木直子　藤野尚子
別所加恵　堀内香代子　町田裕子
松下倶子　松本景子　皆川悦子
三宅純子　宮本政明　毛利亮子
茂木玲子　桃井明男　森晶子
森田矩子　八木高子　安田寛子
八村悠紀子　山田久美子　吉野惠子
依田良子　淀川敬子　米本裕見子
李初容
匿名
学校法人まきば学園　まきば幼稚園
日本福音小石川ルーテル教会　ろう者会

ピースメーカーズ募金（平和を創り出す女性のリーダーシップ養成）

青木惠子　東生野　阿部幸子
石田京子　井上玲子　杁山逸子
臼田治子　内山康一　内山佳子
太田ゆかり　片山惠　上遠惠子
神谷候子　河越良子　KIMCHAN
久我輝子　粂みち代　小谷充子
小村明子　小谷野淳子　近藤眞由美
齋藤知弘　斎藤喜子　坂上信子
佐藤清子　鹿野幸枝　柴田幸子
下村昭子　白戸清　杉田佐紀子
諏訪昭子　田中京子　鶴崎祥子
寺嶋公子　徳永明子　得永道子
富田直美　長尾眞理子　中尾貢三子
中島美登里　中平多惠子　中村とよ子
中山美津江　仁木三智子　新田和子
野﨑誠一郎　野田美由紀　野村春江
野呂幸子　畑山みさ子　濱野万美子
原美左惠　坂内義子　東根順子
東平瑞江　比企敦子　藤田雅子
別所加恵　星野花枝　堀内香代子
松下倶子　松下真佐子　皆川悦子
宮本政明　村岡愛子　毛利亮子
森田矩子　八木高子　安田寛子
善沢志麻　和田崇子　渡部美惠
学校法人女子学院
日本バプテスト女性連合
日本基督教団田園調布教会　シオン会
釧路YWCA
甲府YWCA
新潟YWCA

災害時支援募金（オリーブの木キャンペーン募金）

浅原千代　阿部幸子　荒井重人
安瀬卓司　石井敬子　板橋幸子
市川真美惠　井上玲子　臼田治子
宇都宮芳子　梶山順子　神谷候子
川上哲　久我輝子　粂みち代
桑原貴子　神門佐千子　郷原静江
古藤春世　小村明子　小谷野淳子
斎藤喜子　阪本和子　重松よし子
篠原洋子　下村昭子　白戸清
杉田佐紀子　須藤和子　田中良明
田林綱紀　土屋明子　徳永明子
得永道子　富岡美知子　富田直美
鳥海百合子　中尾貢三子　西田悦子
新田和子　野﨑誠一郎　野々村耀
濱野万美子　林育一郎　東平瑞江
松下倶子　米山麻以子　宮本政明
毛利亮子　桃井明男　森住奈保実
安田寛子　渡部美惠
匿名

（国内外の災害被災者支援）

杁山逸子　KIMCHAN　牧由希子
日本キリスト改革派東京恩寵教会
執事会
公益財団法人福岡YWCA

（熊本豪雨災害被災者支援募金）

杉山知子
日本基督教団余市教会
札幌YWCA
公益財団法人名古屋YWCA
公益財団法人京都YWCA

東日本大震災被災者支援募金

青木惠子　赤川惠子　秋元靖子
浅原千代　東生野　池上幸子
板橋幸子　板橋俊子　井上玲子
臼田治子　江﨑啓子　榎本みつ枝
太田ゆかり　笠嶋多希子　片山惠
神谷候子　川口武宣　川口文子
河﨑純子　KIMCHAN　久我輝子
粂みち代　具島美佐子　桑原貴子
小泉陽子　神門佐千子　河野章子
小谷充子　小宮一子　小村明子
小谷野淳子　齋藤知弘　斎藤喜子
佐藤清子　鹿野幸枝　清水嶋洋子
下村昭子　首藤和子　庄子泰子
杉田佐紀子　杉原壽子　杉本陽子
須藤和子　諏訪昭子　武内冨貴代
田中甫　寺嶋公子　徳永明子
得永道子　富田直美　鳥海百合子
長尾眞理子　中尾貢三子　中西トク子
中村みゆき　仁木三智子　西田悦子
新田和子　仁平のぞみ　塗芙紗子
野﨑誠一郎　野澤節子　野村春江
畑山みさ子　濱野万美子　東根順子
東平瑞江　比企敦子　一杉静子
平石あつ子　藤野尚子　堀内香代子
松岡信子　松下倶子　松下真佐子
松本彰雄　宮本政明　毛利亮子
桃井明男　森晶子　安田寛子
八村悠紀子　山岡清二　山田久美子
山本鉄子　善沢志麻　依田良子
和田崇子　渡部美惠
あかし読書会
東洋英和女学院　同窓会
日本福音ルーテル大森教会　大森ルーテル幼稚園
新潟YWCA
東京YWCA「留学生の母親」運動
城南地区

（カーロサポーターズ募金）

カーロサポーターズ　62件

（2020年10月16日～12月15日
敬称略）

発行所 公益財団法人日本YWCA　〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11　東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121　Fax.03・3292・6122　office-japan@ywca.or.jp　www.ywca.or.jp
編集発行人 実生律子／偶数月1日発行
旬な情報発信しています　メルマガ登録　y-net@ywca.or.jp　にお名前を送ってください ／ フェイスブック　www.facebook.com/YWCAJapan
メールにてご意見・ご感想をお寄せください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。 office-japan@ywca.or.jp
無断での複写・転用・転載はご遠慮ください。